

表10 石器・剥片類一覧表

番号	器種	小計	黒曜石						安山岩						頁岩						メノウ	砂岩	蛇紋岩	ホルンフェルス	凝灰角礫岩	泥岩	その他
1	石鏃	140	6	1	1			1	1	1	54	23	47	1		1					3						
2	石匙	24									6		10		7						1						
3	スクレイパー	35	7								1		22	1							4						
4	二次加工剥片	62	4	1		3	3				5		40			1			2		1	2					
5	楔形石器	87			1	2	4		1	6		71															2
6	石錐	4		1								3															
7	石核	71	24	1		1	3		4	8		24	3					2		1							
8	打製石斧	4									1				1	2											
9	磨製石斧	24								3					6	2	6	1			1			3			2
10	礫器	10													6	1				1		1					1
11	敲石	25											4		1	2	5					11		1			1
12	磨石	186											77		2	1	4					79					23
13	石皿類	53											22									15			1		14
14	剥片類・その他	2739	443	47	59	77	188	4	5	165	12	1312	20	135	34	84	3	17	8	8	33	58	7	5		15	
合計		3464	484	51	61	83	199	5	11	249	35	1529	128	158	44	99	4	21	8	11	42	166	10	7	1	15	43

18.5%となり楔形石器14.9%と続く。比較遺跡が少ないが、概ね前期の曽畑式土器段階の特徴として指摘することができよう。

次に、石材について見てみると、第178図に示したように安山岩の利用が一定量存在していることが挙げられる。石材の質感などから、安山岩類としたものは、上牛鼻産の黒色安山岩に類似しており、石材獲得の特徴としてあげることができよう。さらに、これらの石核や剥片・チップなども一定量出土していることから、これらの石材を入手して遺跡地内で石器製作を行っていたと推察される。上牛鼻産の石材に関しては、黒曜石においても上牛鼻産が最も多く、次いで西北九州産の黒曜石が多い。安山岩もこの傾向に準じており興味深い。

なお、蛇紋岩の剥片類がわずかながら出土している。蛇紋岩製品は磨製石斧のみが出土しているが、この剥片がいかなる石器・石製品の加工途中のものなのか更なる検討を要する。第3節においても触れているが、本県の蛇紋岩産地に関してはまだまだ未解決の点も残されている。

石器の中で、特徴的なものに両極石核・楔形石器が挙げられる。岡村道雄氏の指摘以来（岡村 1976）、県内での事例も増加しており、宮田栄二氏によってまとめられている（宮田 1990）。宮田氏によると、「ピエス・エスキーユが多く出土しているのは、（中略）土器型式がより広域的な拡がりを持つ時期 南下した文化 と共通」する点を指摘し、また、形態分類も行っている。前期の石器組成に関しては宮田氏が、先述した仁田尾遺跡においても高い比率で出土している点を明らかにしている（宮田編 2008）。当遺跡出土資料は四角形状を呈する資料も多く、これも特徴の一つである。

石匙に関しては、摘み部を作出しているものとして捉えた。結果、ガラス質の石材以外にも頁岩などの素材を用いているものがここに分類されたが、石斧製作などで生じた剥片の転用とも考えられる。

磨製石斧に関しては、厚みのある資料は少ない。なお、蛇紋岩製磨製石斧に関しては、第3節に譲る。

(4) 土製・石製品

土製品としては、焼成粘土塊が出土している。焼成粘土塊は、本県においては曽畑式土器段階に比較的多く見られるもので、土器作りの際に生じたものであるとの見方もある。当遺跡の資料については、胎土分析を行っていないためにこれを証明することはできないが、肉眼観察では概ね出土土器と類似した胎土である。

石製品に関しては、2点を掲載しているが、いずれも明確にすることが出来なかった。7は全面が摩滅している以外は明確な人為的加工痕は観察されない。8に関しては、非常に微細な剥片に未完通の穿孔と側辺の線刻が施されている。今のところ類例を見ない。

引用・参考文献

- 岡村道雄1976「ピエス・エスキーユについて」『東北考古学の諸問題』東北考古学会
- 宮田栄二1990「鹿児島県下のピエス・エスキーユ」『南九州縄文通信』3 南九州縄文研究会
- 宮田栄二編2008『仁田尾遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（128）鹿児島県立埋蔵文化財センター（黒川忠広）

第2節 曽畑式土器の製作法について

当遺跡の層からは、曽畑式土器がまとまって出土している。完形品こそ少ないが、良好な状態のものが多く。その中に、土器製作の痕跡を残しているものも出土している。ここでは、これらの資料についてまとめていきたい。

はじめに、曽畑式土器製作の痕跡について研究史を見ていきたい。坂田邦洋氏は、曽畑式土器について、江湖貝塚では、「器形および文様の復元ができた」13点を見

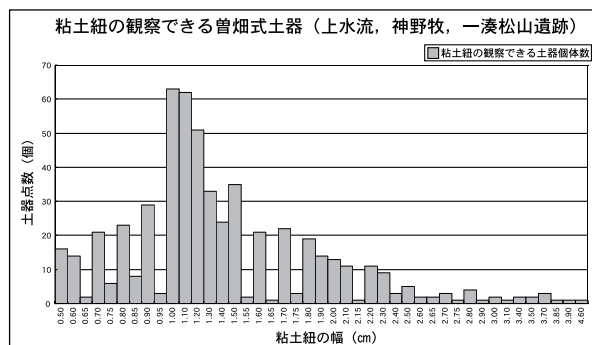
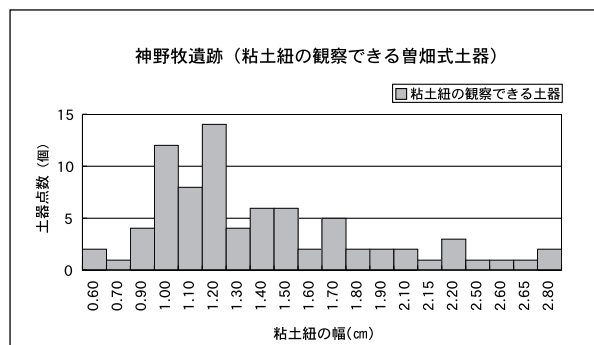
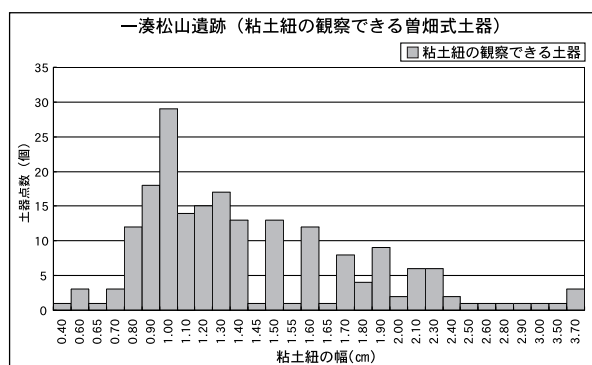
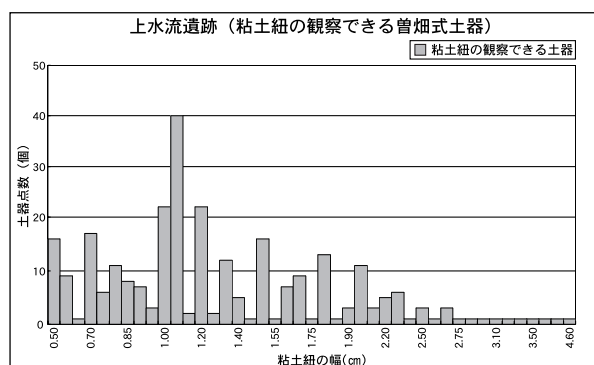
ると、実測図や「輪積みによる成形」とか、「粘土紐を積み重ねる」という記述から判断すると、すべて13点が外見から粘土紐が観察できたことを示している（坂田 1973）。また、江湖貝塚の深鉢形土器では「3～4 cm幅の粘土帯を輪積み」、壺形土器では口縁部を形成する最後の粘土帯は4.5 cm、脇岬遺跡の椀形土器では「2 cm幅の粘土帯を積み重ねて胴部および口縁部を完成する」と述べている（坂田 1975）。本県では、志布志市別府（石踊）遺跡では、「輪積み技法によると思われる接合部が認められる」と紹介されている（立神・中村 1979）。前迫亮一氏は、榎木原遺跡の曽畑式土器を説明する中で、「幅約1.5 cmの粘土帯を小刻みに接合しているのが特徴」と細い粘土紐を積み上げる特徴を指摘している（前迫 1987）。相美伊久雄氏は、仁田尾遺跡の報告の中で「接合痕で割れているものが多くそして小さく割れている印象が強く残った。これは土器制作における粘土紐の幅が狭いことが起因」である可能性を指摘した（相美 2008）。堂込秀人氏は、「幅3～5 cmの粘土帯を巻き上げて制作され、底部は円盤状の粘土で成形する」と述べている（堂込 2008）。水ノ江和同氏は、「櫛目文土器には土器の製作法をはじめ（中略）関連性はほとんど見いだせず、曽畑式の出現問題は判然としない」とした（水ノ江 2008）。以上のように、幾つかの指摘がなされているが、まとまった出土例が少なく不明な点も多い。

それらを踏まえつつ、当遺跡の資料についてみていきたい。粘土紐の幅（粘土紐が観察できたもの280点）について、粘土紐の平均は1.3 cmであった。一見するとこの3倍幅のものが見受けられたが、割れ口から細かく観

察した結果、1～3本を単位にして剥落しているものであった（遺物番号22, 31, 172, 207）。これら多くは3本で、外観上1本に見える。粘土紐間の接合があまい場合、割れ口になりやすい。3本を積み上げて、時間差をもって、次が積み上げられているのであろうか。この粘土紐の積み上げ方法については、底部では、粘土を3つの方法で積み上げている。一つは、螺旋状（遺物番号589参照）に巻き上げて製作するもの。二つめは一つめと同じように螺旋状に積み上げていく時に、底部中心部の直径が2 cm程度の粘土で平らな円盤状もしくは、下方に凸型の円盤状の基部を製作し、螺旋状もしくは輪積みで粘土紐を繋げて製作（遺物番号598参照）するものも見られた。三つめは、粘土を円盤状にして、底部の基部とする。それを、ドーム状もしくは凸状（遺物番号590参照）に形成する。胴部から口縁部では、輪積みもしくは、螺旋状のいずれかで製作されている。水平もしくは斜め上方向に積み上げられている。以上のような特徴が見られた。

では、このような製作技法が普遍的に曽畑式土器に見られるのか、主な曽畑式土器出土遺跡の資料を見ていきたい。対象となる資料は、薩摩半島の一例として当遺跡を、大隅半島の曽畑式土器関連遺跡として鹿屋市神野牧遺跡、離島の曽畑式土器関連遺跡として屋久島町一湊松山遺跡である。

神野牧遺跡では、29点から接合面等の痕跡が観察できた。粘土紐の幅（粘土紐が観察できたもの）については、粘土紐の平均が1.4 cmで、一見するとこの1～3倍幅のものが見受けられるが、割れ口から細かく観察すると1



第179図 粘土紐観察結果

～2本を一塊にして製作されているものが多い。遺物番号288は、割れ口から3本確認できた。また、上水流遺跡と同様に、上下の割れ口が滑らかになっていた。次に粘土紐の積み上げ方法については、底部では上水流遺跡と同様に、螺旋状のもの、底部中心部に、直径が2cm程度の粘土で平らの円盤状もしくは、下方に凸型の円盤状の基部を製作し、螺旋状もしくは輪積みで粘土紐を繋げて製作（遺物番号384参照）するもの、粘土を円盤状にして、底部の基部とするもの（遺物番号353、372参照）が観察できた。胴部から口縁部に関しても上水流遺跡と大きな相違はなかった。

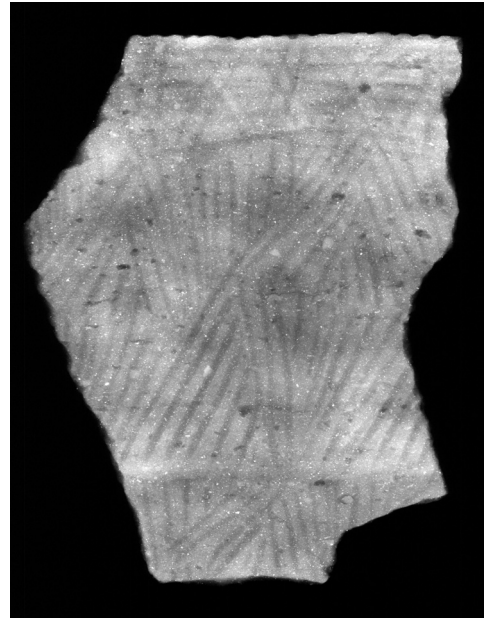
一湊松山遺跡では41点から接合面等の痕跡が確認された。粘土紐の幅については、粘土紐の平均は1.3cmで、一見すると1～3倍幅のものが見受けられるが、割れ口から細かく観察すると1～2本を一塊にして製作されている（遺物番号20、29、65、195参照）。多くは、2本で外観上1本に見える作りになっている。なお、粘土紐の積み上げ方法については、上水流遺跡と大きな相違はなかった。

以上のように、ほかの遺跡においても等しく粘土紐の痕跡が内面に多く残っていることがわかった。また、曽畑式土器に見られる製作技法の痕跡は、上水流遺跡に限らず、非滑石混入の曽畑式土器にも広く認められ、滑石混入の曽畑式土器は、その出土例が少ないということもあるが、接合痕があまり見られないという傾向があることがわかった。また粘土紐は、幅1.3～1.4cm程度を基本として製作されている点。粘土紐の積み上げ方法については、底部では、螺旋状のもの、底部中心部に、直径が2cm程度の粘土で平らの円盤状もしくは、下方に凸型の円盤状の基部を製作し、螺旋状もしくは輪積みで粘土紐を繋げて製作するもの、粘土を円盤状にして、底部の基部とするものが観察できた。胴部から口縁部では、螺旋状もしくは輪積みのいずれかで製作されている。

今回は、上水流遺跡、神野牧遺跡、一湊松山遺跡の3遺跡について曽畑式土器を製作に関する情報を収集した。結果については先述したとおりであるが、その中で幾つかの課題が浮かび上がった。1つは、一湊松山遺跡の滑石混入の曽畑式土器についてである。在地の雲母と滑石を混和剤として製作されたものと、雲母が見られず、滑石が多量に含まれているものとは前者の方が、粘土接合痕を残すものが多い点である。県外の資料を実見出来なかったため十分ではないが、粘土紐の幅や積み上げ法に大差は見いだせないが粘土接合痕を明瞭に残す特徴は、南九州の地域性の可能性も考えられるのではないだろうか。これは内面調整やそのタイミングなどの違いを示している可能性があるもうひとつは曽畑式土器の前段階と後続型式にどのような接合痕が残されているかである。残念ながら、これらに言及することはできなかった。今

後は、対象資料の幅を広げていき該期の土器研究に貢献できれば幸いである。最後に、粘土紐が確認できる土器をX線透過装置で撮影した一湊松山遺跡の遺物番号195を一例として撮影したものを示しておきたい。黒くぼんやりとくもった帯が粘土紐どうしの繋ぎ目である。

今後は粘土紐に関する研究を進めていき、曽畑式土器



図版10 X線写真（遺物番号195）

の製作の過程から派生する諸問題を考察していきたい。また、今後本遺跡について掘り下げて考える機会が生じて来るであろう。その際、新たな研究から多岐にわたる情報を得られれば有り難い。なお、末筆であるが本稿の執筆にあたり中村耕治氏には資料の提供並びに多くの御教示を頂いた。深く感謝し、この稿を閉じたい。

引用・参考文献

- 坂田邦洋 1973 「曽畑式土器に関する研究『江湖貝塚』長崎」 縄文文化研究会
坂田邦洋 1974 「曽畑式土器に関する研究『尾田貝塚』長崎」 縄文文化研究会
坂田邦洋 1975 「曽畑式土器に関する研究『曽畑式土器の器形』長崎」 縄文文化研究会
立神次郎・中村耕治 1979 『別府（石踊）遺跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書
前迫亮一 1987 「1 縄文時代の出土遺物」『榎木原遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(44)
堂込秀人 2008 「曽畑式土器」『総覧 縄文土器』
水ノ江和同 2008 「九州地方・南島」『縄文時代の考古学2 歴史のものさし』同成社
相美伊久雄 2008 「縄文時代前期の遺跡と遺物」『仁田尾遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(128)
(木之下悦朗)



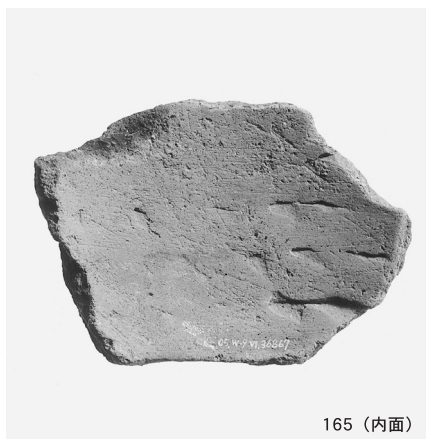
22 (内面)



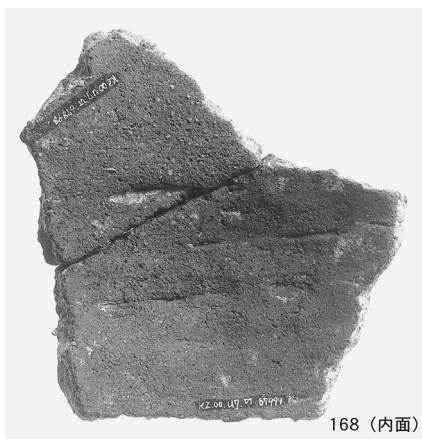
31 (内面)



64 (内面)



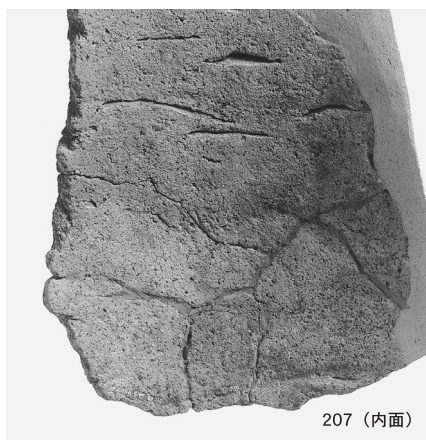
165 (内面)



168 (内面)



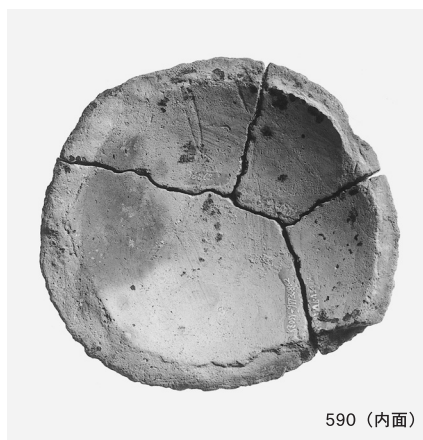
172 (内面)



207 (内面)



500 (内面)



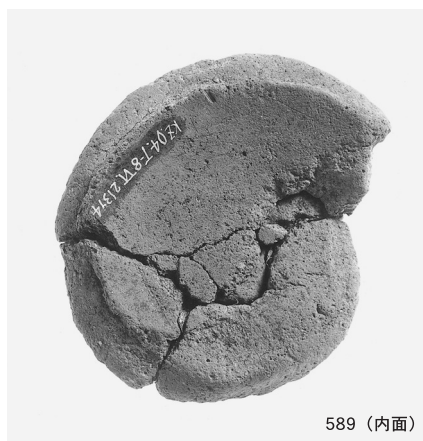
590 (内面)



598 (外面)



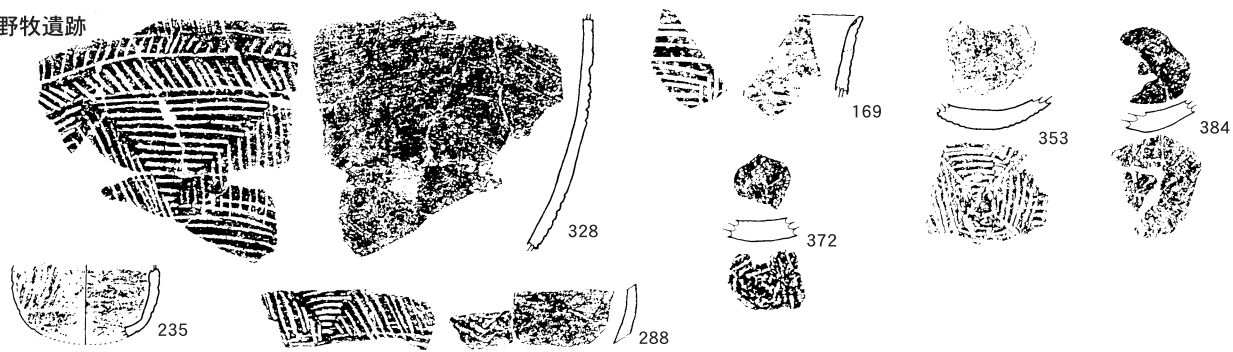
589 (外面)



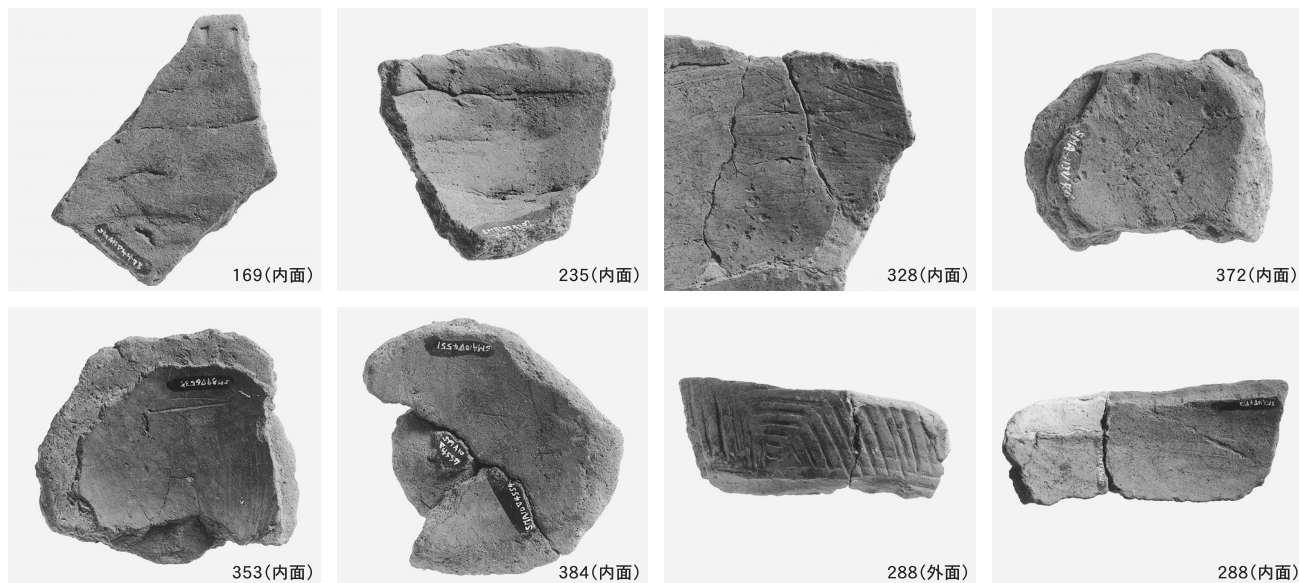
589 (内面)

图版11 粘土接合痕 (上水流遺跡)

神野牧遺跡

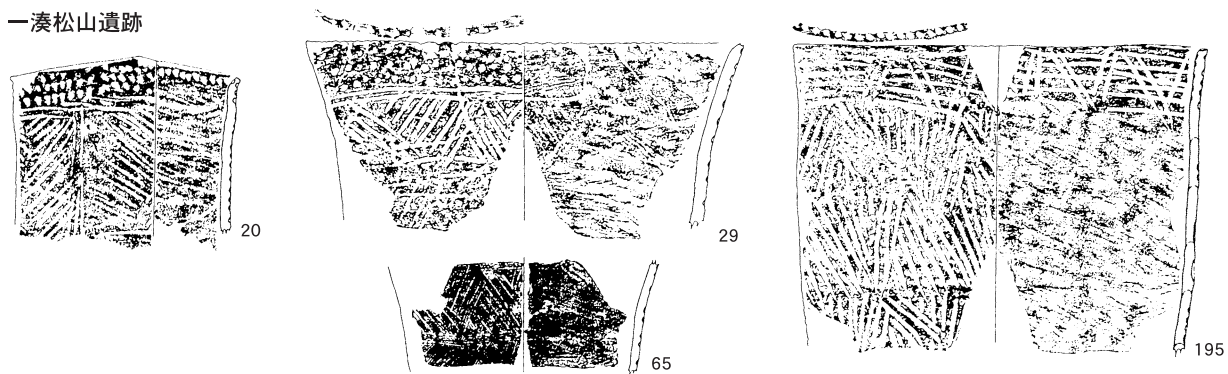


第180図 神野牧遺跡遺物実測図

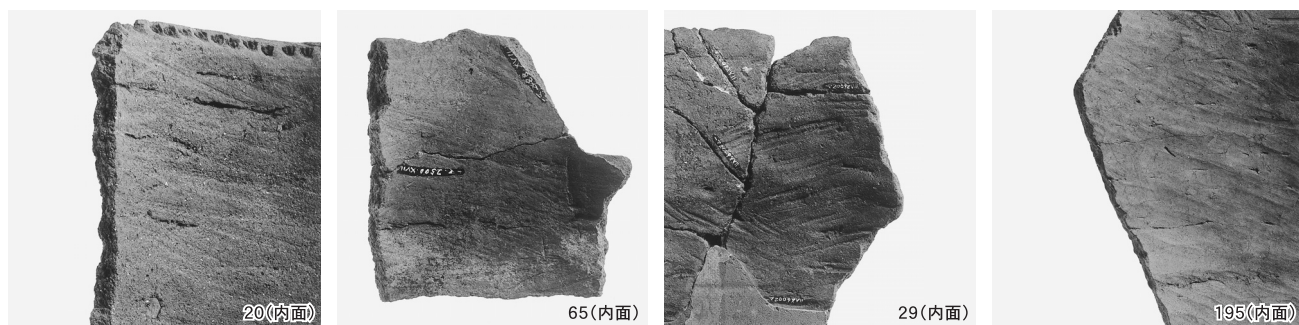


図版12 粘土接合痕（神野牧遺跡）

一湊松山遺跡



第181図 一湊松山遺跡遺物実測図



図版13 粘土接合痕（一湊松山遺跡）